

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02325

研究課題名(和文) ケア・リーバーである大学生のピア・サポートプログラム構築のための調査研究

研究課題名(英文) Research on the Creation of a Peer Support Program for Care-Leaver University Students

研究代表者

上田 裕美 (UEDA, Hiromi)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80302636

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：ケアリーバーである大学生へのピアサポートに関する知見を得るために、当事者を含む社会的養護関係者への調査を行った。大学生への調査では、ピアサポートへの参加経験がある者は半数以上であり、NPO法人、出身施設によるアフターケア、任意団体、大学と福祉機関との協働、など多様な支援者による取り組みが把握された。いずれの調査においてもピアサポートのねらいとして「孤独や孤立感が解消できる場」が最も重視された。ピアサポートを「必要」と回答した学生は65.2%だった一方で、自分について語ることのマイナス面を危惧する学生もあり、「語ること」と「語らないこと」の両方を視野に入れた配慮が求められることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、社会的養護におけるピアサポートの支援内容を明らかにし、実践で支援者が取るべき役割と配慮すべき点を明確にしようとする点に独自性がある。また本研究は、臨床心理学を専門とする研究代表者と社会福祉学を専門とする研究分担者による学際的な研究である点に特徴があり、青年期にあるケアリーバーの自立に向けた支援のあり方に関して、具体的方策を提案しようとする点で、社会に貢献しうる実際的な意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：To obtain knowledge about peer support for care-leaver university students, several surveys were conducted of people involved in social welfare, including those themselves. In the survey of university students, more than half had experience participating in peer support, and efforts by a variety of supporters were identified, including non-profit organizations, aftercare by the care leaver's former facility, voluntary organizations, and collaboration between universities and welfare institutions. In all surveys, the most important aim of peer support was "a place where loneliness and feelings of isolation can be eliminated." While 65.2% of students responded that peer support was "necessary," some students were concerned about the negative aspects of talking about themselves, suggesting that consideration should be given to both "talking" and "not talking."

研究分野：臨床心理学

キーワード：ケアリーバー ピアサポート 学生支援

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し保護するとともに、養育に困難を抱える家庭への支援を行うこと社会的養護といい、ケアリーバーとは、社会的養護を経験した人たちのこと。社会的養護の対象児童数は、現在約4万2千人(こども家庭庁、2023)であるが、社会的養護のケアを巣立った後に、頼りにできる人や場所がないことで、様々な困難を抱えるケアリーバーも多い。

本研究は、ケアリーバーである大学生の問題に焦点をあてた。社会的養護の場からの大学進学率は、従来から一般家庭との格差があることが指摘されてきた。近年では、進学格差を生む要因として、経済的な障壁が把握され、進学助成が増えたことで、ケアリーバーの大学進学率は少しずつ上昇している。しかし一方で、進学後にも困難があり、ケアリーバーの大学中退率は高いという指摘がある。多くのケアリーバーは18歳で施設等を退所するが、退所後に施設職員等を頼りにできない場合には、身近に相談できる大人がいない状態で新しい学生生活をスタートさせることになる。そのため、彼らの学生生活を支えるためには、金銭的な支援の拡充とともに、精神的なケアや困りごとを一緒に考えていくための支援にも力を入れる必要がある。

ところで近年、障害福祉や精神保健福祉をはじめとする様々な支援の場で、「ピアサポート」といわれる支援活動が行われてきている。「ピア」とは、同じような立場や境遇、経験等を共にする人たちを表す言葉であり、「ピアサポート」とは、共通項や対等性を持つ者同士の支え合いを指す活動を意味する。社会的養護の場においても、共通項を持つ仲間との人間関係や意見交換の場があることは、青年期のケアリーバーの自立を支える上で重要な意味を持つと思われる。また、援助者から被援助者へという一方向的な支援ではなく、当事者がお互いに支え合うというピアサポートは、ケアリーバーが自らの持つ力を自覚し、自己信頼の感覚を育てる機会になるのではないかと期待される。しかし我が国において、ケアリーバーにおけるピアサポートは萌芽期にあり、その内容や効果を検討した研究は見当たらない。

2. 研究の目的

本研究は、ケアリーバーである大学生におけるピアサポートのあり方を明らかにすることを目的にした。以下の「研究の方法」で述べた、当事者を含む社会的養護関係者への調査を通して、社会的養護におけるピアサポートの特色と課題、青年期のケアリーバーにおけるピアサポートのニーズ、現行の実践の実態とニーズ等を把握し、ケアリーバーである大学生へのピアサポートプログラムを作成するための基礎的知見を得ることを目指した。

3. 研究の方法

(1) 当事者への聞き取り調査

青年期のケアリーバー4名(うち、2名は当事者活動にリーダーとして取り組んでいる)を対象に聞き取り調査を行い、活動をめぐる当事者の経験と認識、当事者活動で留意すべき点、などを把握した。

(2) アフターケア事業を行う事業所への質問紙調査

社会的養護の施設を退所した者等を対象に退所児童等アフターケア事業を行う団体を対象に、ピアサポートをめぐる実態と課題、支援者の考え方を把握するための質問紙調査を行った。調査は、アフターケア事業の全国ネットワークに参加している団体を中心に、41事業所(NPO法人、社会福祉法人、任意団体等)を対象に調査票を郵送した。

(3) ケアリーバーである大学生への質問紙調査

全国の国公私立4年制大学に通う、児童養護施設等の社会的養護の場での生活経験を持つ大学生1~4年生164名を対象に、ピアサポートのニーズ把握のための郵送による質問紙調査を行った。調査時期は、2023年12月から2024年2月にかけて実施した。

(4) 座談会の開催

当事者活動を行うケアリーバーに、子ども虐待の防止をテーマとする授業に来てもらい、当事者活動について語ってもらった。その後、受講生を交えて意見交換を行った。

4. 研究成果

(1) 当事者への聞き取り調査

調査は、2021年12月から2022年3月にかけて実施した。40分程度の聞き取りを行い、当事者活動をめぐる経験とニーズを尋ねた。コロナ禍の状況を踏まえ、聞き取りはオンラインを活用して実施した。

養育施設退所後に一番必要だと感じた支援としては、養育施設や養育者との関係が切れないことの重要性が指摘された。また、依存できる人や精神面へのサポート、生活上の手続きについ

て教えてくれる人、保証人等への対応の必要性、などが挙げられた。当事者活動の良さとしては、誰かのために何かをすることやその活動の意志が受け継がれることが回復にもたらず力、対等な関係性や理解しようとする人間関係があることの良さ、などが指摘された。一方で、関わる人同士の間関係や活動継続に関わる難しさが困難としてあげられた。また、当事者の中には、自分の経験を自分の中に受けとめるのに時間が必要な段階から次世代の子どもたちを助けたいと思う段階まで様々な段階があるということ、また、自分語りがトラウマを惹起する場合もあるため、「今は語らない」という選択が保証される枠組みや体験を語る事が自他に及ぼす影響をよく考える必要性、過度の依存や金銭トラブルを防ぐこと、できることとできないことの限界を設定すること、などの留意点が把握された。

(2) アフターケア事業を行う事業所への質問紙調査

アフターケア事業における居場所支援等のピアサポートの現状とニーズを把握するため、2022年2月初旬から3月中旬にかけて質問紙調査を実施した。退所児童等アフターケア事業を行う事業所41か所をリストアップし、調査票を郵送した。その結果、22事業所から回答を得ることが出来た(回収率は約53.7%)。17事業所がサロン等の居場所支援のための活動をしていることが明らかになった。

支援全般の現状と課題

事業所が行うケアリーバーへの支援では、利用者の抱える状況に応じて、極めて多様な対応が取られていることが明らかになった。食や生活用品等の物資やお金の直接的な支給、住基取得までの住まいの支援やDVと虐待被害者への緊急的なシェルターの提供など、利用者の抱える困難な問題の解決に取り組まれている状況が明らかになった。また、「生活全般の相談」へは全ての施設が、「衣食住の緊急的な支援」へは約9割の事業所が対応しており、ケアリーバーへの支援は、生活困窮者支援と重なる部分があることがわかった。弁護士と連携しながら相談にあたるケースや利用者の育児支援を行うケースもあることが自由記述から把握され、問題の解決のために他の機関や専門家とつながる必要性が示唆された。主な利用者の年齢(複数回答)では、20歳代(90.9%)と10歳代(81.8%)が多く選択されたものの、30歳代(50%)、40歳代(13.6%)、50歳代(4.5%)も選択されており、30歳代以上の退所者のニーズへもアフターケアの事業所が援助的な役割を果たしているケースも把握された。事業所の取り組みにおいては、補助金や寄付、措置費や自治体の委託費が活用されていることがわかったが、一方で運営者が身銭を切って支援に携わるケースもあり、支援者への資金援助が喫緊の課題であることが把握された。

ケアリーバーの居場所の支援の内容とねらい

「サロンやフリースペース、利用者同士の交流会など」の居場所支援は、22事業所のうち17事業所(77.3%)が実施しており、サロン等の活動内容は、「いつでも利用できるフリースペースを準備している」が最も多かったが、さまざまな行事や食事を共にする活動も行われており、共に活動する関係性の中で、不安で張り詰めた利用者の気持ちが少しずつほぐれ、安心感や笑顔が生まれることが支援の入り口として重要であることが把握された。

「居場所の支援」で支援者が重視するねらいとして、「利用者の孤独や孤立感を解消」し、「困難や大変さを分かち合える人間関係を築く」ことが大切にされていることがわかった。また、自由記述の結果から、利用者との「つながりを維持し続けること」が居場所の支援の基本であることが把握された。

(3) ケアリーバーである大学生への質問紙調査

2023年12月から2024年1月にかけて、全国の国公私立4年制大学に通う、児童養護施設等の社会的養護の場での生活経験を持つ大学生1~4年生164名を対象に調査票を郵送し、46人から回答を得ることができた(回収率は約28%)。

ケアリーバーへのピアサポートの現状と効果

ピアサポートへの参加経験を尋ねた項目(「社会的養護の当事者同士のつながりや活動の場に参加したことがありますか」)において、52.2%が「ある」と回答し、約半数の学生に参加経験があることがわかった。参加した活動には、NPO法人による取り組み、出身施設によるアフターケア、社会福祉法人や任意団体による取り組み、大学と福祉機関の協働による取り組み、など様々な支援者による取り組みがあることが把握できた。活動に参加して良かったこととして、一人暮らしに必要な知識や日用品の提供など、一般の大学生のニーズと共通する事柄と、施設職員や在園生・卒業生とのつながりを感じることができたことや孤独感の解消、後輩の力になれたことなど、ケアリーバーに固有の内容とがあることがわかった。一方で、各支援活動における必要性を尋ねた項目への回答では、「奨学金等の情報提供」「理解してもらえ人間関係がある」「食料や生活用品を調達し、ニーズがある人に届ける」「進学や就職に向けた学習会の開催」などの割合が高かった。

ピアサポートをめぐる当事者のニーズ

ピアサポートをめぐる当事者のニーズについては、ピアサポートを「必要である」と回答した

学生は 65.2%であり、回答者の 6 割以上が必要を感じていることが明らかになった。「必要である」と回答した理由として、「施設退所後は心のよりどころである施設や職員との関係を失ってしまう可能性があり、居場所を作るためにもピアサポートが必要である」「職員の忙しさを考えると施設には頼りにくいためにインフォーマルな頼る場所も必要である」「周囲に理解されにくい事情であるため自分で抱え込んでしまいやすい問題を共有できる場が必要である」「同じ境遇の仲間がいることで安心感が得られると思う」など、「心のよりどころや安心感・孤独の解消」が理由として多く挙げられた。「ピアサポートのねらいとして重視すること」としては、「利用者の孤独や孤立感が解消できる場」の割合が最も高く認識された。

実施あたって求められる配慮

一方で、ピアサポートの必要性について「わからない」という回答が 28.3%、「必要ではない」が 6.5%あった。その理由として、「交流やサポートが必要かどうかは人それぞれで異なる」「人の話を聞くことで疲れた」「過去のことを思い出していやになることがあった」「人に極力関わりたいくない」「ピアサポートの効果が不明瞭」などがあげられた。これらの結果から、「人と関わる」「体験を共有する」ということを切実に求める学生がいる一方で、「関わりたくない」と感じる学生もいることにも目を向ける必要があることがわかった。

さらに、ピアサポートを始める場合に想定される困難としては、「運営資金の不足」や「責任の所在」、「対人関係上の問題（利用者同士）」などの割合が高く認知された。

(4) 座談会の開催

当事者活動にリーダーとして取り組むケアリーバーに、教員志望の学生が受講する児童虐待防止をテーマにした授業へゲスト講師として参加してもらい、社会的養護と当事者活動の実際について語ってもらった。その後、受講生を交えて意見交換の時間を持った。受講生の中には、社会的養護やケアリーバーについて初めて知った者もあり、虐待に関する理論を教えられること以上に、当事者の話に心を打たれた様子が見られた。多くの受講生から、「子どもの声を聴き、子どもの気持ちに寄り添ったケアが必要だと再認識した」という感想を得た。当事者が当事者以外に対して活動を開いていくことは、社会全体で児童虐待の防止と社会的養護への理解を深める一助となる可能性が確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 城戸 楓, 小崎 恭弘, 阿川 勇太, 小崎 遼介, 上野 公嗣, 瀧川 光治, 田辺 昌吾, 野澤 祥子	4. 巻 1巻2号
2. 論文標題 COVID-19 下におけるリスクイメージと対処意識が保育士と保護者の 信頼関係に与える影響に関する検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 防災教育学研究	6. 最初と最後の頁 49～61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.51004/rjde.1.2_49	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 高木 悦子・小崎 恭弘・阿川 勇太・竹原 健二	4. 巻 78巻第4号
2. 論文標題 全国自治体で実施されている父親への育児支援の現状	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保健師ジャーナル 78巻4号 (2022年8月発行)	6. 最初と最後の頁 306～310
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1664201854	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 上田 裕美	4. 巻 71
2. 論文標題 ケアラーバーへの居場所の支援に関する考察-アフターケアを行う事業所への調査から-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要. 総合教育科学	6. 最初と最後の頁 267～282
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32287/TD00032519	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 高木 悦子, 小崎 恭弘, 阿川 勇太, 竹原 健二	4. 巻 70
2. 論文標題 全国地方自治体で実施されている父親を主な対象とするポピュレーションアプローチ事業の実施状況調査 結果報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本公衆衛生雑誌	6. 最初と最後の頁 483～494
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11236/jph.22-071	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 上田 裕美	4. 巻 72
2. 論文標題 ケアリーバーである大学生の学生生活に関する調査	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要 総合教育科学	6. 最初と最後の頁 229-243
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32287/TD00032831	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 上田 裕美
2. 発表標題 青年期のケアリーバーによる当事者活動に関する聞き取り調査
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第29回学術集会滋賀大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 上田 裕美
2. 発表標題 社会的養護のもとで生活する子どもの育ちを考える
3. 学会等名 王寺市民生委員協議会講演会(招待講演)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小崎恭弘 田邊哲雄 中典子編者	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 220
3. 書名 第4版 子ども家庭福祉論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	小崎 恭弘 (KOZAKI Yasuhiro) (20530728)	大阪教育大学・教育学部・教授 (14403)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関